

あいまいな幻想郷と私 ～東方随想～

酔鏡仙

このような場において個人的体験から語り始めてしまうことは誠に恐縮であるが、本題に入る前に、原点としての私と『東方』の出会いから語らなければならない。

それは、この原稿を書いている丁度7年前の、2008年3月頃の事だった。当時私はまだ大学生で、何を研究したいかも覚束ない駆け出しの青二才であった。

私に『東方』という作品の存在を教えてくれたのは、今も同人関係で付き合いのある同期生の友人だった。きっかけが何であったかはもはや忘却の遥か彼方であるが、彼の勧めから当時はまだ発売されて一年と少ししか経っていない『東方求聞史紀』（一迅社、2006）を読み、その幻想郷という世界観に魅せられてしまったことが、今日私の居る『東方』との最初の遭遇であったと言える。

元々私は、鳥取県米子市という土地に生まれ育ち、隣町に当たる境港市出身の漫画家・水木しげるや、近在の島根県松江市と縁の深い作家・小泉八雲の作品に親しみを覚え、また幼い頃、寝物語に親から聞かされた「因幡の素兎」や「八岐の大蛇」などといった山陰地方に伝わる神話や伝説に非常な興味があり、それが昂じて大学において歴史学を選択したようなところがあった。それ故に、友人が見せてくれた『東方』の世界観——妖怪や神霊達が暮らす不思議の土地・幻想郷に魅了され、さっそく原作を手に入れて慣れない弾幕STGというゲームジャンルに四苦八苦しながらもプレイしたり、『蓬莱人形』をはじめとする音楽CDの音色に酔い痴れたり、そのような形で段々に『東方』への傾倒を深めていったわけである。

何故このような私自身の個人的体験から語り始めたのかと言うと、詰まるところ私の『東方』に対する考察というものは、東方と出会う以前から持っていた妖

怪、神話、民間伝承そして歴史というものへの興味が下地にあり、それら無くして私自身の『東方』に対する愛着や理解、幻想郷という世界観への“まなざし”は語れないから、である。

「幻想郷」をどのように捉えるか？

これは、所謂“東方考察クラスタ”のみならず、東方二次創作を行うあらゆるジャンルの人々が一度は直面する壁のようなものではないか、と私は思っている。

それは、例えばある作者は、江戸時代を舞台とした時代劇に出てくるような山深い未開の村を想像したり、またある作者は、現代の山村よりもほんの少し様相が違うだけの日本の農村風景を想像したりと、個人によって幻想郷のイメージは千差万別である。また、例えば博麗神社一つをとってみても、祠に毛が生えた程度の小さな社をイメージする者から、鳥居・拝殿・本殿などと一通りの設備が整ったそれなりの規模の神社をイメージする者まで、十人十色である。

このような、年間無数に生み出され続けている東方二次創作における、幻想郷という世界観の多様なイメージの「原点」はどこにあるのか？

原作における幻想郷そのものに関する記述は、実は意外な程に少ない。

- ・山奥の辺境の地
- ・日本の何処か
- ・結界によって外部と遮断されている

「幻想郷は何処にあるのか？」という具体的な地理設定すら、原作には殆ど登場していない。それ故にか、東方ファンが集まるインターネット掲示板サイト『東方幻想板』には「日本のどの辺に幻想郷が位置してい